

私自身もフランスで中等教育（中学と高校）に従事しているが、おぞましい事件が起きた。ある公立中学の歴史地理の教師が、中学2年の授業でムハンマドの風刺画を扱ったことを理由に、イスラム過激派のテロリストに路上で斬首されたのである。

そもその前提として、暴力やテロ、ましてや殺人など肯定できようはずがない。いかに風刺画がひどいものだとしても。事件の直後、教師をはじめ多くの人々がデモ行進した。殺害された教師とその家族に連帯を示すとともに、表現の自由という大義名分を守るためでもあった。また11月2日フランス全土の学校で1分間の黙とうが行われ、ライシテを振り返る意味を込めてジャン・ジョレスの「教員への手紙 (Lettre aux instituteurs et institutrices, le 15 janvier 1888)」が読まれた。

個人的には、教師がムハンマドの風刺画を授業で使用したこと自体は問題ないと考えている。フランスの公教育におけるライシテの原則として、神聖なものは存在せず、存在しないものを冒涇するという概念も存在しない。しかし、与える側は受け取る側への影響を考える必要もある。ひどい消化不良を起こすようなものを与えるべきかどうか。保護者が敏感に反応する年代の授業で、大人も消化しきれていない教材を使うことに対する判断基準は何だったのか。11月19日のルモンド紙によると、問題になった10月8日の授業以降、学校は脅迫などで緊張状態が続いていたらしい。テロリストに口実を与えたと非難する同僚もいたようだ。またこの教師は、配慮のつもりで、風刺画でショックを受けるとする生徒は教室を出たり、目をつむったりするように指示していたという。それはつまり公共教育の場で、自身の信教信条を示させることになる。これはライシテの理念に反する。とはいえ、彼は授業後に不手際があったことを認め、クレームのあった家庭には謝罪し、もうこのテーマの授業はやめて、次は移動の自由か中国のネット上での検閲を扱おうと思うと述べていたという。非があれば認め改善しようと努力する、素晴らしい教師だったのだろう。

公教育の場には当然保護者の影響がある。宗教上の理由で公教育の基本的な原則を受け入れないのは論外だろう。2019年9月から2020年3月までの間に、宗教的標章の着用、教師への問題行動（男子生徒が女性教員に話しかけるのを拒否するなど）、学校活動（プール、性教育など）の拒否、布教活動といったライシテの原則に抵触する事例が923件報告されている。ライシテの問題は、間違いなくいまも教育の場でくすぶり続けている。

ところで、『風刺画』というのは、高度な知性が必要だ」と書いている記事を読んだが、個人的には表現の自由には高度な精神性が求められると感じる。ライシテの闘争を経て信仰をもつ自由ともたない自由を得たが、その結果心を鍛える手段が弱くなってしまったということはないだろうか。一般的に、フランス人は強固な信念と強い自由意志を持って発言し、そこに揺るがない自信があると受け取られている。それは事実であろうと思うが、自由の名のもと何でもかんでも好き勝手な言動をする人たちではない。対面する人の気持ちを汲み取り、温かい思いやりをもって接してくれる。表現の自由を、心の節制をもって実践している人たちだ。ホロコーストやナチス賛美に対する

厳しい対応でもそれが分かるだろう。しかし、テロリストの暴力に過激な感情をもって訴え、表現の自由という言葉に酔って対立構造を煽っている人たちがいると思えなくもない。事件後マクロン大統領が演説で風刺を捨てないと明言した日、トゥールーズ市とモンペリエ市では、シャルリ・エブド紙のムハンマドの風刺画がプロジェクターで庁舎正面に映し出されたという。

風刺画自体は、もちろん表現の自由として尊重されるべきだ。この連載でカトリック教会や政治家に対する風刺表現を紹介したこともある。しかし、「風刺を受け流せないのは、フランスの自由や共和国精神が分かっている」という構図ができあがり、甘受できないことが悪とされるような風潮がある。フランス在住の善良なイスラム教徒はムハンマドの風刺画に苦しんでいると思う。そしてそんな風刺画は少数なのに、いろいろなところでそれらの風刺画を使用、転用して、フランスに同化しようとする市民の痛みを増幅させている。それはフランスの博愛の精神に反しないのだろうか。キリストの風刺画もたくさんあるから同じだという理論は現実にはそぐわない。いわば身内の、しかも権力の権化として批判の対象だったカトリックを追いやる中で耐性を身につけた人たちと、その後フランスに住んだイスラム教徒とでは、今現在の問題として受け取り方に差がある。そして、イスラム教徒を自認する非常識なテロリストがそんな風刺を受け入れないのは明白で、フランスはテロの標的になっている。それだけが原因ではないにせよ、イスラムを侮辱するごく少数の風刺画がフランスの国全体を危機に陥れるのに一役買っている。

体制宗教としてのカトリック批判、そこからの脱却、そして勝ち得た信教の自由。加えて、移動、言論、結社などさらに大きな自由を享受できるようになった。これらはフランスが人類に貢献した誇らしい遺産であろうと思うし、今後も人間にとって失ってはいけないものだと思う。しかしながら、それで勝ち得たものが新たな対立構造を生み出し、その憎しみの増幅装置のように機能するのであれば、負の遺産となってしまう。はたして1905年法以前と比べ、精神性は向上したのか。宗教が以前のように大きな影響力を持つことはなく、また宗教側の甚大な努力も不可欠だとはいえ、その教義にはまだまだ精神の進歩に貢献できる余地があるように思う。

[参照インターネットサイト] (2020年11月28日閲覧)

今井佐緒里 『18歳が教師の首を切断するテロ。フランスで何が起きたのか：イスラム教徒との共生社会のために』 <https://news.yahoo.co.jp/byline/saorii/20201018-00203502/>

"Des caricatures de "Charlie Hebdo" projetées à Toulouse et à Montpellier" <https://www.lci.fr/population/hommage-samuel-paty-les-caricatures-de-charlie-hebdo-projetees-a-toulouse-et-a-montpellier-2167922.html>

"Ces centaines d'incidents que décrivait le rapport sur la laïcité à l'école remis à Jean-Michel Blanquer" <https://www.marianne.net/societe/education/ces-centaines-d-incidents-que-decrivait-le-rapport-sur-la-laicite-a-lecole-remis-a-jean-michel-blanquer>